

## 若手育成委員会企画「初期キャリアの形成」ワークショップの記録

若手育成委員会委員長  
油布佐和子（早稲田大学）

日本教育学会では、学会に所属する若手研究者の育成・支援を目的とし、2016年に若手育成委員会が設置された。既にこれまでもアンケート調査やワークショップが開催されており、今回の企画は第3回目に当たる。過去の若手会員のためのワークショップを踏まえ、今回は、若手研究者の『初期キャリアをどう形成するか』というテーマで、『教育関連学会連絡協議会・シンポジウム』に連動する形で2019年3月16日に開催された。

ワークショップに先立って、若手育成委員会委員の元兼正浩会員（九州大学）から、近年の初期キャリア形成の課題について、若手研究者を取り巻く環境を踏まえた講演が行われた。元兼会員は、『教育学研究』の編集委員として査読に携わった経験から、〈優れていない論文〉に対するコメント例を引きながら、〈優れた論文とは何か〉について言及した。また、研究費の確保という観点から「科学研究費」等外部資金の獲得に向けた書類の書き方、近年の公募に見る特徴などを示した。

この全体講演のあと、それぞれの専門領域に分かれて、初期キャリア形成についてのワークセッションを実施した。アドバイザーは、それぞれの研究領域で若手奨励賞や学会賞などの受賞歴がある方に依頼し、当日の進行を委ねた。テーマを絞って対話型のセッションを行ったり、アドバイザーの体験の披露から始まって個別の課題についての質疑応答が続いたり、ワークセッションの方法は領域によってまちまちであったが、アドバイザーと参加者の間でプライベートな問題も含め、かなり深いやり取りが行われ、参加人数が少ないことが幸いした結果となった。

各領域でのワークセッションの様子は以下のとおりである。若手研究者を取り巻く環境は恵まれたものではなく、また、領域や機関、地域によっては、情報を入手しにくい状況もある。情報ネットワークを共有しながら、研究環境そのものを改善していくこと、またそれについて学会としてのバックアップを行うことも必要であると考える。

### 【教育史】【教育哲学・教育思想史】

アドバイザー：山本 和行（天理大学）  
関根 宏明（明治大学）

#### 若手研究者ワークショップに参加して

今回、教育史の講師として初めて参加させていただいたが、大学院生・若手研究者をめぐる研究状況は、自分自身が院生だった15年前とはまた大きく変わっているように感じる。経済面、研究環境、研究ポスト、競争意識などなど、どのようなトピックをとりあげてもポジティブな面を見出すことが困難なように思い、さしあたって自分の経験を共有しながら、参加者とともに考えることぐらいしかできないように思った。

ただ、参加者との議論を通じて感じたのは、いかに「良い研究」を積み重ねていくかということ

への意識は必ずしも言葉にしなくても共有されていて、そのうえで具体的な課題をどう乗り越えていくのかという意識が強いということだった。なにをもって「良い研究」と考えるかということは議論のあるところだが、研究を続けるというシンプルだが基盤にあるべき目標が参加者のあいだに共有されていたことに、少し安心した。

今回は参加者の多寡もあり、教育哲学・思想史のセッションと一緒に議論をしたが、他の分野の方々とも共通した課題があるだろうし、課題の違いから学ぶこともあるだろうと思うので、分野間のコラボレーションによる議論ができれば、より充実した学びを得ることができるかなと感じた。

気づけば後進が生まれているような世代になってきたことを実感したので、これからも自分の研究をしっかりと積み重ねつつ、「次の世代」が続いてくることができるような環境を作ることに尽力していきたい。（山本和行）

## 【教育行政学】

アドバイザー：大畠菜穂子（金沢星稜大学）

日本教育学会若手研究者ワークショップの報告

時間：11：40-13：30

参加者：合計4名（申込2名+オブザーバー1名+アドバイザー1名）

報告要旨

本分科会では、まず、アドバイザーが、以下の5点について報告を行った。

- ・自己紹介：博士論文執筆、初職獲得に至る経緯
- ・研究の際に使っているもの：evernote、マインドマップ、KJ法
- ・時間管理の方法
- ・モチベーション管理の方法
- ・初職獲得のための事前準備

次に、アドバイザーの報告を受けて、参加者からは、研究の際に使っているエバーノートやマインドマップの使い方と料金について、投稿論文執筆の期間（どの程度のペースで執筆していたか、1年に2本を異なる学会に出すことは可能か）、博士論文執筆の方法（課程博士と論文博士の違い）、就職活動の際の資格について質問や意見が出された。また、今後、英語による研究成果の発表が求められると考えられることから、いかに英語力をつけていくかという点についても議論された。

最後に、アドバイザーが使用しているマインドマップとKJ法について理解を深めるため、参加者自身の問題関心と抱えている課題を題材として簡単なワークを実施した。最後のワークに十分な時間を確保できなかった点が反省点である。

## 【教育社会学】

アドバイザー：須藤 康介（明星大学）

教育社会学分野の参加者は、修士課程学生1名、博士課程学生1名、修士卒者（社会人経験者）1名であった。各自の経歴などを紹介し合った後に、話題提供者（須藤）からの話題提供を質疑応答を交えつつ行った。大きくは「大学（学部）での経験」「修士課程での経験」「博士課程での経験」

「研究員のときの経験」「博論の執筆について」「就職について」「就職から現在まで」の順で議論した。参加者から特に関心を持たれたのは、選抜度が低い大学での非常勤講師を経験しておくことが、就職の際に役立つということであった。話題提供者はこれを（高地トレーニングならぬ）「盆地トレーニング」と呼称した。今にして思えば、普通に「低地トレーニング」と呼ばばいいと思うが…

具体的には、小学校レベルの算数が身につけていない大学生を対象に、社会調査士認定科目を教えた経験があると、就職の際に「〇〇大学で教えられたのだから、うちの大学でも大丈夫でしょう」と受け止めてもらえる。また、選抜度が中程度の大学に就職しても、自分の出身大学とのギャップに戸惑うことが少なくなる。

その他、大学院で指導教員以外の教員から指導を受けることは、研究を進める上で有益であるが、指導教員から嫌がられるかむしろ勧められるか、大学院によって文化が異なることなども話題に上った。

## 【比較教育学】

アドバイザー：鴨川 明子（山梨大学）

「研究者の初期キャリアをどう形成するか  
—比較教育学の場合—

比較教育学ワークショップの参加者は5名で、その内訳は、社会人で修士入学を考えている方、博士課程入学を考えている方、社会人で博士課程の方、留学生でポスドクの方、既にポストを得て働いている方などバラエティに富んでいました。すべての参加者の方々が、「外国・海外」と「教育」をかけ合わせたところに何らかの研究関心をお持ちで、比較教育学を専門とするゼミ等に所属する方はいらっしゃいませんでした。以下、若手育成委員会からあらかじめ指定された論点にそって、議論の概要を示します。

まずは、参加者の方々に自己紹介をお願いしました。私からは、現在国立大学法人の教職大学院に勤める一方、前職では留学生の多い大学院に勤めていたこと、マレーシアを主なフィールドに研

究調査に従事してきたことなど自己紹介をしました。続けて、博士論文までにどのようにリサーチクエストを立て、留学やフィールド調査をしてきたかという経緯を簡単な年表で示しました。ある参加者は、修士論文を執筆した後に「土くさい研究」をしなさいとお世話になった先生に諭されたことが、参加者ご自身の経験と重なり印象的であったようです。フィールド（対象とする国や地域）をどのように決めたかについては、「フィールドの将来性」とリサーチクエストとのバランスという観点から議論しました。特に、比較教育学分野ではフィールドやテーマが多岐に渡るため、若手研究者や大学院生の横のつながりを国内外の学会で作るのはどうかとお伝えしました。

次に、比較教育学分野で論文を作成した時に直面した課題・問題として、言葉の壁、人とのネットワークづくり、海外で調査許可を取得するまでの道のり、質的調査を記述する際の困難、類似する地域やテーマを研究する仲間が少なかったことを挙げました。参加者からは、博論と査読論文との関係や、比較教育学分野において評価される査読論文の傾向に関する質問や意見が出ました。

研究生活を支えた財政的基盤として、日本学術振興会の特別研究員（DC2とPD）、日本育英会や日本学生支援機構、留学のための奨学金や民間スカラーシップなどを通じて、生活費だけでなく、渡航費や調査費をどのように工面してきたかをお話しました。特に、財政的支援を得るために、情報収集や情報共有が鍵であったと強調しました。これまで科研を継続して獲得することができたのは、分野を問わず採択された方にコツを伝授いただき、時に申請書をその方たちに見ていただいたことが大きかったように思います。

初職を獲得するまでに、何本履歴書を書いたか、面接にはどれぐらいの頻度で呼んでいただいたか、非常勤講師の経験は就職活動に生きるか、（就職のために）専門分野以外の論文は書くべきかなど、参加者の方がとりわけ気になるであろう点をトピックに挙げ意見交換しました。

まだ途上にある方へのアドバイスは2点挙げました。①就職先のニーズは何か、比較教育学の強みは何かについて内容面と方法面の両面から考えて実行するという点と、②なかなか専門分野の職に就くことは難しく、任期付きの職のハードさと取り巻く環境や緊張感の中、いかにして気持ちを

保っていくかという2点です。参加者の方とのやりとりから、研究者という仕事のおもしろさ、比較教育学の将来性にまで話題はおよびました。

以上、参加者の方がバラエティに富んでいたため、それぞれの方の興味関心に寄り添わせることができたか疑問ではありますが、ご用意いただいたお菓子を囲みながらざっくばらんに、笑いの絶えないワークショップとなりました。少人数だからこそその「生々しい語り」をすることができていれば幸いです。私自身も、大学院生の時に書いたものを引っ張り出しつつ、これまでの歩みを振り返るよいきっかけになりました。

### 【教育方法・教育課程】

アドバイザー：渡辺 貴裕（東京学芸大学）

参加者は4名で、みな大学への就職を希望している大学院生だった。やはり初職に就くまでの部分が最大の関心事のようだったので、まずそこを中心に私自身の経験を話し、その後、質問が出た事柄についてやりとりをするといった形で進めた。

実は、今回、院生・若手に向けてキャリアの話をとという依頼があった際、（もちろん光栄なことではあったが）最初お引き受けするのを躊躇した。というのも、私は、大学の学部、大学院の修士・博士、その後と研究テーマが揺れ動いてきてしまったし、課程博士論文を書かないうちに就職が決まってそのまま来てしまったしで、キャリア形成の良い見本になれるとは思えなかったからだ。が、「それでも大丈夫です」と担当理事の先生に背中を押され、お引き受けすることになった。

当日は、そうした自身の研究テーマの変遷についても正直かつ率直に話した。博士課程で行っていた自分の研究は、資料を探して調べていく作業は楽しかったが、その分野で自分が第一線の研究者として活躍している姿がイメージできなかったこと、研究とは関係なく学部4年生の頃から通っていた演出家の故竹内敏晴氏のレッスンで培われた感覚が土台になって、大学院時代に学校現場にかかわり始めたときに問題意識を抱き、その後の演劇教育・ドラマ教育の研究へとつながっていったこと、ただし実際にそれが学会誌掲載論文として実を結んだのは大学に就職してからであったこと、就職については田中耕治先生の研究室でのプ

プロジェクトを通しての成果物や運のおかげが大きかったこと、その後も偶然の出会いや当初は特に実利的なことを求めていなかったつながりの転化などによって自身の研究が発展していったことなどである。

私にとっては予想外なことに、こうした話は大学院生らから好評だった。彼らには、研究室で、課程博士論文の提出に向け計画的に研究を進める、「逆算思考」で各時期にやるべきことを判断し実行するといった、強いプレッシャーがかかっているらしい。「一直線に研究を進めていかなければならないと今まで思っていたので、少し気持ちがラクになりました」とある院生は話していた。もちろん、計画的に進められるのならそれに越したことはない。だが、それとは異なる、紆余曲折のなかから何かが浮かびあがってくるような筋道もあり得ると知ってもらえたのであれば、私の話も少しはお役に立てたのかなと思う。

この部会では、分野の性質を反映して、学校現場と研究者とがどう付き合っていくかということが大きな話題となった。「大学院で研究室でかかわっているときには学校との接点があるとしても、その後はどうやって学校とのつながりをつくっていくのですか？」といった質問や、私が校内研修における関係（教師同士、大学教員と教師集団）の組み替えについて話していたのを受けて「今は自分は院生なので学校に入るときにも『教えてもらう』立場でいられるけれど、大学教員になった後、どうやって『上から教える』立場に陥るのを回避できますか？」といった質問が出た。こちらからも、「『大学の先生は現場を知らない』という批判をどう受け止めてどう応じるか」といった問いを投げかけて話し合った。実践への教育方法学研究者の関わり方は、個々人による違いにとどまらず、世代による違いを経てきたと私は考えている（例えば、私が、自らもまた「実践者」であると認識して研究と実践を行うのも、時代や学問状況による規定を受けたものだろう）。おそらく今後も、このテーマは、各研究者だけでなく教育方法学という学問分野自体のアイデンティティの問題として、検討され議論されていくべきものであるだろう。

今回、大学教員を志す大学院生のみなさんとのやりとりを通して、自分がこれまでのキャリアにおいて何をやり何を大事にしてきたか、見つめ直

すことができた。当日の参加者のみなさん、企画してくださった先生方にあらためて感謝を申し上げる。

## 【女性研究者の困難】

アドバイザー：保田 直美（佛教大学／京都教育大学大学院連合教職実践研究科）

「女性研究者の困難」グループには7名の参加者があった。講師役の保田の簡単な自己紹介のあと、まず、お一人ずつ、現在の立場とこのワークショップに参加した理由（聞きたいと思っていること）をうかがった。参加者はすべて女性で、すでに結婚・出産・育児などを経験されている方も複数おられたため、保田がこれまでの経験を話しつつも、ほかの皆様にもご経験やお考えをお話いただくなど、ざっくばらんに進めることとした。当初の保田の予定では、各個人が今の生活のなかでの困りごとを少しでも解決できるヒントを得るという目的を設定していたのだが、ワークショップの企画者である油布先生にご提案いただき、学会に対してどのようなサポートがほしいかといったことについても話し合うこととなった。

出された問題の一部を、学会で必要だと考えられるサポートの提案も含めて紹介する。まず1点目が、不安定な立場であることによる福祉的な支援（産休・育休・保育所入所など）の受けにくさである。私自身もそうであるが、博士論文を書きつつ結婚・出産などのライフイベントを経た場合、大学院生であっても休学期間がある・無給の研究員である・任期付きである・非常勤のみなど、そのキャリアパターンは複雑かつ不安定である。今回の参加者もそのような方が多かった。その場合困るのが、福祉制度の支援を受けづらくなるということである。非常勤の場合、現実的には産休・育休がとれない。辞めるか、なしで働くかのいずれかしか選択肢はない。妊娠中、不測の事態があっても授業は急には休みづらい。学会での取り組みの範疇は超えるのかもしれないが、非常勤でも産休・育休がとりうるようなシステム作りができるとよいのかもしれない。

そして出産後も、保育のための環境をどう確保するかという問題が生じる。わかりやすいフルタイム職ではないため、保育所に入所できないこと

も多い。競争の激しい地域では、「学生」や「学振特別研究員」などの身分がはっきりしていても、「忙しさ」をフォーマルに証明しにくいことが問題となる（これは学会の問題ではないが、学振が雇用関係でないこともまた話をややこしくさせる）。「学生」であるが実際には共同研究をとりしきっている場合などの忙しさの説明を、対外的に、非研究者に、行うことはなかなか難しい。そして、保育所に入所できないと、実家などの支援がない限り、研究はかなり困難になる。保育所申請の際の添付書類・説明資料となりうる何らかの忙しさ（勤務時間）の保証を第三者的にフォーマルに出してもらえようシステムが、学会として何かあるとありがたいかもしれないという意見も出た。

つぎに2点目が、出産・育児によって生じる研究のままならなさの問題である。基本的に、出産・育児に関わる問題は、個人でコントロールできるものではない。保育所に入れたとしても、研究時間は思い通りに常に捻出できるわけではない。十分な成果が出せないときも生じてしまう。子育てをしている場合としていない場合では、研究に使える時間は大幅に変わる。いくつかの大学で女性研究者を優先的に採用するアフーマティブ・アクションも行われているが、まだ不十分なのではという意見もあった。ただ、（これは保田の意見であるが）子育てで研究時間が十分にとれない問題は、女性だけの問題ではない。男性でもそのような場合はある。また、子育てに限った問題でもない。介護で時間がとれないことも、ブラックな職場環境で時間がとれないこともあるだろう。

選抜を、何をもって「正当化」されたとみなすかは簡単ではないと思うので、ここではもう一つ、子育ての多忙さで十分な成果が出せないことにより生じる、個人に起こるモチベーションの低下のほうを問題にしておきたい。グループでは、「周りから趣味で勉強をしているように思われる」という発言もあった。育児をしていると、何も十分にできないのになぜ研究を続けているのか、何を研究していると言えるのか、と自問自答してしまい、アイデンティティを見失いやすい。また、初職につくまでの期間が長期化してくると、研究室から離れ、研究者のネットワークからも外れがちになるといった問題もある。そのような所属をどうしていけばよいかという質問もあった。この問題も、もしかすると学会で何らかの「場」を作ることに対応可能かもしれない。ただ、時間のない人がネットワークを作る時間をとれるのかという問題は残る。このあたりは現実的にどう解決していくか、検討すべき課題となるだろう。

今回、「女性研究者の困難」という課題設定であったが、出産・育児は女性だけの個人的な問題ではない。その違和感はグループでも提出された。そして、女性研究者が直面する困難も出産・育児だけではない。今後は、女性だけに対象を限ることなく、さまざまな研究者を取り巻く困難についてトピックごとに議論し、制度的にどのような取り組みを行うべきか引き続き提言していくことは大切であろう。

以上